

平成29年第6回  
総務文教常任委員会

# 所管事務調査報告

日 時：平成29年7月12日(水)  
午前10時00分～午前11時00分

場 所：委員会室

調査内容：企画情報課所管事務調査  
(1) 域学連携事業について

出席者：総務文教常任委員ほか1名

説明者：企画情報課長

## 国見町議会

松 浦 常 雄 委員長 . . . . . 2 ~ 3

浅 野 富 男 副委員長 . . . . . 4

東 海 林 一 樹 委員 . . . . . 5

八 島 博 正 委員 . . . . . 6

佐 藤 定 男 委員 . . . . . 7

松 浦 和 子 委員 . . . . . 8

# 平成29年第6回総務文教常任委員会 企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月20日

国見町議会議長 東海林一樹様

国見町議会議員 松浦常雄

## 【調査内容】企画情報課所管事務調査

### (1) 域学連携事業について

#### 1. 域学連携事業とは

大学生と教員が地域に入り、地域住民とともに、地域の課題解決あるいは地域作りに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成につなげる事業。

#### 2. 町と大学との相互連携協定

協定の内容

- ①教育、文化、福祉の向上のための連携
- ②地域産業振興のための連携
- ③人材育成のための連携
- ④まちづくりのための連携
- ⑤その他必要と認める連携

#### 3. 主な域学連携事業

##### (1) 福島大学

- ①内谷地区集落活性化事業 行政社会学類 岩崎ゼミ 平成26年度～
- ②徳江第9町内会集落活性化事業 行政社会学類 岩崎ゼミ 平成28年度～
- ③歴史を生かしたまちづくり 大学院地域特別研究 平成26年度～  
博物館実習3年生 平成27年度～

##### (2) 桜の聖母短期大学

- ①食育推進・産品開発プロジェクト 生活科学科食物栄養専攻1・2年生  
平成26年度～
- ②くにみの未来づくりワークショップ 福島学履修生1年生 平成27年度～

#### 4. 域学連携その他の取り組み

#### 5. 今後の域学連携事業について

#### 6. 地域が育てる“若者”が創る地域プロジェクト

平成29年度復興庁〔地域づくりハンズオン支援事業〕

## 【感想】

- (1) 域学連携の目的や町と大学との相互連携協定の内容が理解できた。
- (2) 福島大学及び桜の聖母短期大学との域学連携事業の内容が理解できた。

学生が、地域に入り、地域の人々と接し、交流しながら地域のことを調査研究することにより、相互に得るところが多い。

地域の人々は、地域のよさ（宝物）に気づき、誇りを持つことができていると思う。また、学生にとっては、大学内では学べない貴重な体験学習ができていると思う。

2年～3年間にわたる両大学との域学連携事業が地域の活性化に大きな成果を上げている。

域学連携事業が、内谷地区のほか、貝田地区や森江野第9町内会でも行われていることは、喜ばしい。このことが他の町内会の活性化の参考になれば一層望ましい。

- (3) 域学連携はまだ始まったばかりなので、地域の活性化や人材育成をもっと進めるために、今後も継続してほしい。また、域学連携の状況や成果を町民に紹介してほしい。

以 上

# 平成29年第6回総務文教常任委員会 企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月20日

国見町議会議長 東海林一樹様

国見町議会議員 浅野富男

## 【調査内容】企画情報課所管事務調査

### (1) 域学連携事業について

域学連携事業とは、・大学生が地域に入り住民とともに地域の課題に取り組みながら地域づくりを継続的に進めて地域の活性化や人材育成につなげようとする事業。

本町は桜の聖母短期大学と福島大学の2校と平成26年の4月及び9月にそれぞれ連携協定を締結している。主な連携事業は以下のとおりである。

② 内谷地区集落活性化事業「福大、行政政策学類」平成26年度～

② 歴史を生かしたまちづくり事業、

平成26年度は「福大、大学院地域特別研究」町歴史的風致維持向上計画策定に向けた支援

平成27年度からは「福大、博物館実習3年生」貝田、小坂まると博物館

③ 徳江第9町内会集落結成化事業「福大、行政政策学類」平成28年度～

④ 食育推進・産品開発プロジェクト「聖母、生活科学科食物栄養専攻1・2年生」平成28年度～

⑤ くにみ未来づくりワークショップ「聖母、福島学履修生1年生」平成27年度～

⑥ この他にも東京藝大、仙台大学、郡山女子短大等との連携で6事業があり、現在も進められている。また事業対象地域も町全域に及んでいる。

### 【感想】

近年、議会でも大学教授等の講演が企画されることが多く、なんとなく大学が地域で果たす役割、大学は何のためにあるのかという疑問が少しずつ解けているように思うが、今回の調査で改めてそのことを実感した。またこのことは大学側としてもそのありようが見直されていることもあるのだろうと思う。しかし、学生側、地域の方々ともに初体験ともいえる現象なので、その接点はまだ深く理解されたものになってはいないのではないかと。

本事業の多くは「地域のたからものの発見と活用」という副題がついている。地域の「たからもの」を発見し活用することは、地域の維持発展にとって欠かせないことである。だからと言って、地域の住民からは調査に駆り出されるという意識しか持たれないのでは「たからもの」の価値も下がってしまうのではないかと。これでは本来の目的からそれることにもなるので、相互理解が深まるような努力も惜しまずに事業に取り組んでもらいたい。

以上

平成29年第6回総務文教常任委員会  
企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月20日

国見町議会議長 東海林一樹

**【調査内容】企画情報課所管事務調査**

**(1) 域学連携事業について**

企画情報課長より、域学連携事業の概要と目的について説明があった。

大学生と教員が地域に入り、地域住民とともに、地域の課題解決あるいは地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成につなげる事業である。

福島大学との取り組みと桜の聖母短期大学との取り組みをそれぞれ具体的に挙げて説明があった。この事業を通じて、国見の再発見やお宝発見にもつながる事業になる。

地域が育てる「若者」が創る地域プロジェクトにつなげ、若者に世の中に出て役立つ知識、技能を身に付けさせ、一時期は町外に出たとしても最終的には国見に戻ってもらい地域に役立つ人材を育てることを目標にしている。

**【感想】**

地域に戻ったときのメリットを具体的に示す必要があるのではないかと

例えば、奨学金の返還を免除するなど。

以上

平成29年第6回総務文教常任委員会  
企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月21日

国見町議会議長 東海林一樹様

国見町議会議員 八島博正

**【調査内容】企画情報課所管事務調査**

**(1) 域学連携事業について**

町内の地域住民と共に地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化を図る事業である。

福島大学や桜の聖母短期大学との取り組みについて説明を受けた。

**【感想・意見】**

(1) 福島大学とは、平成26年度から連携し、

- ① 内谷集落活性化事業
- ② 徳江地区第9町内会集落活性化事業（平成28年度から実施）
- ③ 歴史を活かしたまちづくり、貝田宿及び小坂宿、大木戸地区の取り組み

などが今年も行われており、その成果に期待している。

(2) 桜の聖母短期大学とは、平成26年度から連携し、

- ① 食育推進・産品開発プロジェクト
- ② くにみ未来まちづくりワークショップ事業

などに取り組んでおり、事業の成果に期待している。

以上

平成29年第6回総務文教常任委員会  
企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月15日

国見町議会議長 東海林一樹様

国見町議会議員 佐藤定男

**【調査内容】企画情報課所管事務調査**

**(1) 域学連携事業について**

**1. 域学連携事業とは**

- 大学生と教員が地域に入り、地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成につなげる事業。
- 事業の取組みにより、地域は大学の知識・情報・ノウハウが活かされる。大学は学生の実践の場が与えられるなど双方のメリットがある。

**2. 福島大学との域学連携事業（地域の宝ものの発見と活用を考える）**

- 内谷地区集落活性化
  - ・戸別訪問調査を行ない、「お宝マップ」や「広報うちや」を作成した。
- 徳江第9町内会集落活性化
  - ・国見焼体験や芋煮会を実施、学生からマルシェ開催の提案などを受けた。
- 歴史を生かしたまちづくり
  - ・貝田宿、小坂宿に関しお祭りへの参加、城館踏査、古文書調査を行なった。

**3. 桜の聖母短期大学と域学連携事業**

- 食育推進・産業開発プロジェクト
  - ・国見町を知る「町めぐり」「農業体験」や「地域食」を学んだ。
  - ・レシピコンテストにも参加、メニュー開発に取り組み成果を挙げた。

**【感想・意見】**

- 域学連携により大学生の若い考え方・感性が取り入れられていると感じる。
- 事業の継続により、地元の魅力を再発見し活かしていくよう期待する。

以上

# 平成29年第6回総務文教常任委員会 企画情報課所管事務調査報告書

平成29年7月21日

国見町議会議長 東海林一樹様

国見町議会議員 松浦和子

## 【調査内容】企画情報課所管事務調査

### (1) 域学連携事業について

- ①域学連携事業とは大学生と教員が地域に入り、地域住民とともに地域の課題解決あるいは地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成につながる事業であると説明を受けた。最大のメリットは人材の育成。
- ②現在、町と大学の相互連携協定は福島大学、桜の聖母短期大学と締結しているが、今後、仙台大学との相互連携協定も視野に入っているとの説明。
- ③福島大学との取り組みについて説明。福島大学の内谷集落活性化事業への取り組みは4年目になり、目に見えるものをと、取り組みをまとめた広報誌を作成した。字が大きく大変読みやすい気配りのある広報誌であると思った。また、平成28年度より徳江地区第9町内会集落活性化事業として新たに活動を始めた。
- ④桜の聖母短期大学との取り組みについて説明。食育推進・産品開発プロジェクトでは、ヒット商品の「もも大福」がある。その他にも郷土食の研究やスイーツの開発に取り組んでいる。また、くにみ未来まちづくりワークショップの取り組みでは、平成28年度に国見小学校6年生との取り組みの成果を学習発表会で発表し、好評を得た。
- ⑤平成29年度の事業として、復興庁「地域づくりハンズオン支援事業」を活用しての中学生以上を対象とした取り組みの説明を受けた。

### 【感想】

学生が大学で学び研究していることを活かして、地域住民のリーダーとなり地域に刺激を与える。つまり、地域住民にとっては日常茶飯事のことが実はすごい宝であるとか、発見や気づきといった新鮮さや驚きを域学連携事業によって感じることはできたことは大きな成果であると思う。福大生が作成した広報誌は地域の宝となって伝えられていくと思った。今後の徳江地区の成果にも期待したい。

また、桜の聖母短期大学との連携については、学生は2年の短い在学期間ではあるが、素晴らしいプロジェクトで子どもたちとのコミュニケーションも良く、成果を上げている。スイーツの開発に当たっても国見産の食材を活かした開発に取り組みヒット商品を生み出しているのは、先輩の意思を受け継ぎ後輩が取り組んでいる成果と思う。余談になるが、もも大福の製造には、国見出身の学生も参画し、成功の一翼を担っていたことを付け加えさせていただく。

以上